

三谷



立川 川の東部に位置し立川下名に属す。北東は徳島県、南西は中央に接する。

北部の「宮の谷」、東部の「一の谷」、西部の「井手」をあわせて三谷という。宮の谷と一の谷の水を集めて西流する井手川は立川川に合流する。三つの谷に現在28戸36人が暮らししている。

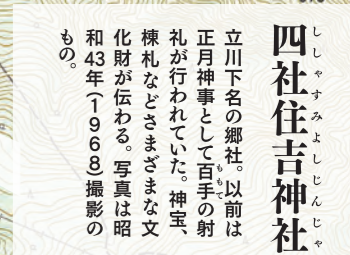
三谷は、三つの小村すべてに御堂と神社が現存することが特徴の一つである。なかでも井手の四社住吉神社は、三谷のほか、刈谷、中央、一の瀬を氏子圏とする下名の郷社である。



大師堂
正面・側面ともに1間の宝形造。背後に巨大な岩壁がお祭りには弘法大師の入定日とされる3月21日(旧暦)。



海津見神社
一の谷の氏神。小字「ヲカ」に建つことから「ヲカノ宮」と呼ばれる。現在旧暦6月に例祭が行われている。



四社住吉神社
立川下名の郷社。以前は正月神事として百手の射礼が行われていた。神宝、棟札などさまざまな文化財が伝わる。写真は昭和43年(1968)撮影のもの。



阿弥陀堂
正面・側面ともに3間の宝形造。江戸時代後期の会日は正月11日で堂地は3代2歩(約66m)。



吉岡城跡
戦国時代、川井丹後の居城と伝わる。

三崎神社
宮の谷の氏神。『土佐州郡志』(18世紀初)によると、年に5日間お祭りをしていた。鳥居をくぐると明治23年(1890)に宮の谷の川井氏が奉獻した狛犬が建つ。



ツエナシシ堂
六角形式の御堂。設立年代などは未詳だが、堂内には石仏、木仏などがあり、この御堂の傍らには地域八十八ヶ所とみられる石仏が残る。



四社住吉神社(下名郷社)の神宝類

戦国時代、永正11年(1514)の棟札や天文22年(1553)の曲物をはじめ、神像・神鏡・木器類など多くの文化財が伝わる。写真右手の木箱には神事面が収められており、中央奥の板書には寛文5年(1665)の再興遷宮の様子が記されている。



四社住吉神社(下名郷社)の神事面

中段左端の鬼面裏に寛文7年(1667)の刻銘がある。これらの仮面は、数十年に一度の遷宮の際に使われたのではないかと伝承されている。



大師堂の鰐口
直径21cm。享保19年(1734)下名の川井仁左衛門が奉掛している。

阿弥陀堂の木造不動明王立像(右)と毘沙門天立像(左)



ともに檜の一木造で、室町時代の作。像高約74cm。

- 三谷の主な文化財**
- 木造不動明王立像・毘沙門天立像 室町時代 / 阿弥陀堂
 - 阿弥陀堂新再興棟札 江戸時代 享保20年(1735) / 阿弥陀堂
 - 石造阿弥陀如来坐像 江戸時代 / 阿弥陀堂
 - 住吉四所大明神上棟棟札 戦国時代 永正11年(1514) / 四社住吉神社
 - 住吉大明神曲物 戦国時代 天文22年(1553) / 四社住吉神社
 - 再興遷宮板書 江戸時代 寛文5年(1665) / 四社住吉神社
 - 神事面 鬼・老人・男・女・ウソ吹き 江戸時代 寛文7年(1667) / 四社住吉神社
 - 鰐口 江戸時代 享保19年(1734) / 大師堂



路傍の墓石
宮の谷にある墓石。天明5年(1785)の銘がある。

地域八十八ヶ所

四国八十八ヶ所霊場を模し、ある地域の範囲内に作られた「地域八十八ヶ所」(ミナハチヤケ)が三谷にある。これは集落に置かれた1から88までの番号が刻まれた仏像の総称で、八十八ヶ所を全て巡拝することで結願成就となる信仰である。古来によると、大正時代頃に置かれたもので、集落の誰かが病になった際、住民数名が集まってミナハチヤケ所をまわっていたという。三谷の住民だけでなく、立川のほかの集落からも巡拝に訪れた人がいたそうである。仏像は三谷の御堂や路傍などで確認することができる。そのほか三谷と隣接する地域でも同様の像が数カ所で見られる。これらの仏像も三谷の地域八十八ヶ所の一部であると思われる。



宮の谷の路傍

ツエナシシ堂

三谷の文化財

下名の郷社である四社住吉神社に伝わる一群の神宝類は、立川の文化財の中でも、ひときわ注目される。中でも、戦国時代の棟札と曲物は、県内でも残存例が少なく、貴重である。永正11年(1514)の棟札は、佐伯氏が納めたもので、「上棟住吉四所大明神」と表書されており、四社住吉神社の創建に関わる可能性がある。また、天文22年(1553)の曲物も、同じく佐伯氏が同社に納めたもので、佐伯氏の繁栄を祈願したものである。

- 三谷の主な文化財**
- 木造不動明王立像・毘沙門天立像 室町時代 / 阿弥陀堂
 - 阿弥陀堂新再興棟札 江戸時代 享保20年(1735) / 阿弥陀堂
 - 石造阿弥陀如来坐像 江戸時代 / 阿弥陀堂
 - 住吉四所大明神上棟棟札 戦国時代 永正11年(1514) / 四社住吉神社
 - 住吉大明神曲物 戦国時代 天文22年(1553) / 四社住吉神社
 - 再興遷宮板書 江戸時代 寛文5年(1665) / 四社住吉神社
 - 神事面 鬼・老人・男・女・ウソ吹き 江戸時代 寛文7年(1667) / 四社住吉神社
 - 鰐口 江戸時代 享保19年(1734) / 大師堂

区長の話

～村の産業～



立川地区長を兼任されている高橋邦寿区長(73)に大師堂までご案内いただいた。その道中、セントウ岩なる巨石の上で休憩をとった。この巨石は、広く平らで日光がよく照ることから、三極をへんて(皮を剥いで)アク抜きしたものを、乾燥させていた場所だという。昭和40年代頃までは、紙幣の原料である三極の栽培が盛んで、住民の主要な現金収入であった。当時は「三極講」という相互援助の制度も存在した。約50年前、三極が縁で東京の造幣局に就職した若者もいたという。

※本ページの白黒写真は、中西三男編「昭和のおとど白黒写真集」(私家版、2015年)より引用した。

一の瀬



立川の最南部に位置し、北は中央に、南は川口地区に接する。

南部の「一の瀬」と、北部の「柳瀬」をあわせて一の瀬の集落が形成されている。そのほか「馬船」「東谷」という小村も存在したが現在は無人である。集落には現在19戸39人が暮らしている。

集落は昭和16年(1941)の国民学校令により、隣村の川口小学校の学区となつて以来、行政区画では川口地区に属す。行政的には立川地区から切り離されているが、多くの住民にとっては立川への帰属意識が根強く残っている。

海津見神社
もとは中央集落の中谷の氏神であったが、現在は一の瀬集落が管理を行っている。かつてはここで雨乞いを行っていたという。



郷士本山家 屋敷跡
上名村番人庄屋の分家である郷士本山家は、4代目八郎右衛門の時代以降、柳瀬に住んだ。同家は柳瀬の渡しの番役を勤めていた。

六地藏
県道拡張に伴って昭和61年(1986)に現在の地に立てられた。集落の南端にあたるこの辺りの小字を「ロクジソウ」という。六地藏【だが実際に今立っているのは一体である。



湫洞淵
海津見神社の側にある神秘的な淵。龍神がいるなどの奇怪な伝説が残っている。



高知自動車道
参勤道より、(川の江方面)をのぞむ。平成4年(1992)、古代以来の北山官道に沿う道筋で大豊・川之江間が開通。これにより交通の利便性は向上したが、集落の風景も大きく変化した。



八坂神社
一の瀬の氏神。成立年代などは未詳だが、江戸時代中期以降の棟札や神宝の鏡など、多くの文化財が伝わる。



一の瀬を流れる立川
林業がさかんな立川地区では、かつて立川を利用して材木を流し、一の瀬で陸あげしていたといわれる。



八坂神社の板書

大正15年(1926)旧9月、神社の鳥居を建て替えた際の寄附者の芳名を記す。金3円寄附の水野亀之助以下、79名の名前が見える。川口在住者の名前も見える。



八坂神社の神宝類

写真左から神鏡、鏡、鎌類、鐙。
神鏡は全部で7面あり、藤原光長と光政の銘がある。神鏡と鐙は年代未詳であるが、左から3番目の鐙は墨書から正徳5年(1715)奉納のものと思われる。

八坂神社の幕末の棟札



左は安政3年(1856)の祇園宮建立棟札、中央は文久3年(1863)の聖宮遷座棟札、右は元治2年(1865)の祇園宮上葺棟札。

海津見神社の神棚
海津見神社には明治から昭和の棟札がある。明治30年(1897)の棟札には「東本山村大字立川下名柳瀬・東谷・中谷惣氏子中」の墨書がある。



区長の話
吉川寛士区長(67)は、父親の代より引き継いだ下名郷社の総代を務めている。

下名分の刈谷、中央、三谷に在る総代を束ねるのが総総代である。区長の家では、三谷の四社住吉神社以外にも、八坂神社と海津見神社の管理や祭りの世話をしている。一の瀬集落の氏神を祀る八坂神社は自然であるが、海津見神社はそもそも中央集落の中谷の氏神だといふ。過疎高齢化の原因で、近年集落を越えて管理を譲渡されたのである。

「いよいよ立川には人がいなくなってしまう。」と区長は人口減を憂う。

一の瀬の文化財

一の瀬では、八坂神社と海津見神社に文化財が伝わる。

八坂神社にある正徳5年(1715)11月の棟札は、中谷の七郎兵衛ら3人が「本願人」となり、豊楽寺の賢者が導師を勤めて、聖宮を「新建立」した際のものである。八坂神社には、「正徳5年未ノ十二月吉日」の墨書のある鏡も伝わっており、恐らくこの鏡は、聖宮の建立直後に奉納されたものと推測される。

さて、立川には江戸時代の棟札が多く伝わるが、その内の何点か

は、豊楽寺の僧侶が導師を勤めた際のものである。江戸時代、立川上名村・下名村は、本山郷に属す村々であったが、寺院や神社といった宗教面では、豊永郷に所在した豊楽寺の支配を受けていた。現在でも立川に豊楽寺所管の御堂が多いのはそのためである。

立川はいま過疎高齢化の渦中にある。本誌で紹介したこれらの文化財は、百年後、二百年後、どうなっているのだろうか。鎌倉から戦後までの各時代の地域の遺品が今は確かに存在する。改めてそのことを記録しておきたい。

一の瀬の主な文化財

- 聖宮新建立棟札
江戸時代 正徳5年(1715) / 八坂神社
- 神宝 鏡
江戸時代 正徳5年(1715) / 八坂神社
- 地主権現宮造建棟札
江戸時代 享保8年(1723) / 八坂神社
- 神鏡 銘藤原光長・光政
江戸時代カ / 八坂神社
- 鳥居立替寄附者芳名板書
大正時代 大正15年(1926) / 八坂神社
- 渡津見大神奉祭木札
明治時代 明治30年(1897) / 海津見神社
- 海津見神社本殿新再建棟札
大正時代 大正8年(1919) / 海津見神社

一の瀬と川口の集落境にある境界札

集落の境には「諸災防禦」の八坂神社の折橋札が立てられている。



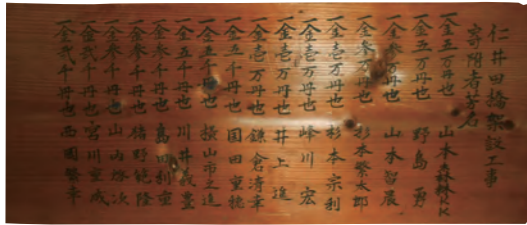
柳瀬の吊り橋

柳瀬には、昭和35年(1960)頃に架けられた仁井田橋という吊り橋がある。

橋が架かる場所は江戸時代、参勤交代時に立川川を下名村から上名村に渡っていた地点であり、その折には仮設の板橋が架けられていた。その後、複数の丸太を繋いだ木橋が架けられるようになったが、台風や大雨の度に流さなければならなかった。

集落ではこの不便を解消すべく、寄付を募り鉄製の橋を架けたのである。橋は通常、行政によって造られることがほとんどであるが、柳瀬の吊り橋は「集落の橋」である。

現在では寄付を募ることはほとんどなくなったが、昔は神社の修繕や道普請など、集落としての活動の際にはよく寄付を集めていたという。



▲集会所に保管される寄附者芳名